校長室だより～燦燦～ №４６１

月に向かって

2021.11.24

もうかれこれ１２年前になる。今、私が乗っている車を買ったときのことである。南会津の中学校に新任教頭として赴任した。その当時、乗っていた車はＦＲ（後輪駆動）車だった。冬期間には雪が積もり、気温も下がる南会津の地に、ＦＲ（後輪駆動）車で立ち向かうなど無謀である。四輪駆動の車に買い替えるのが通常の思考である。だが、何を思ったか、「まあ、何とかなるだろう」という何の根拠もない楽観主義のもと、最初の冬を迎えた。

南会津は、除雪が完璧だった。夜中の２時、３時から除雪車が動き出していた。おかげで、私のＦＲ車でも、さほどの支障はなかった。ただし、週末の土湯峠の下り道は必死だった。最新の注意を払う必要があるほど危険だった。そこで、考えた。「この車では限界か」

南会津で二度目の春を迎える前に、新しい車を買うことにした。部活動の顧問は引退したが、長男も長女もクラブチームでソフトテニスをやっており、人と荷物が入り、子どもたちが長距離での移動にも耐えられるようにと、後部座席が広い車にした。私の好みよりも実用性重視である。

この車はＦＦ（前輪駆動）車だった。ＦＲ車よりはまだましではあるが、冬期間の安全性が高いとは言えない。その分、特に冬期間は慎重に運転した。ところが、どうも予期せぬアクシデントが、何度もその車を襲った。この車の場合は、納車後に神社などで行う安全祈願なるものを怠っていた。あまりにも、これはおかしいということで、今さらとは思ったのだが、やむなく近所で安全祈願なるものをしていただいた。

すると、アクシデントは止まった。気のせいなのかもしれないが、結果オーライである。南会津での単身赴任生活が３年、その後も、週末になるとソフトテニスの大会等での遠距離運転が続いた。そして、二度目の単身赴任生活である。今度は、さらに遠い奥会津と福島の往来となり、車を酷使する生活が続いた。

長女が高校に進むと、週末の遠征等の距離が尋常ではなくなった。平気で岩手や秋田、青森などに行く。インターハイでは、１年目は会津若松なのでよかったのだが、２年目は三重県、３年目は宮崎まで行ってしまった。さすがに宮崎まで車で行くのは気が引けた。距離もそうだが、すでにエンジンをかけると、異常音を発していた車での宮崎との往復が、果たして可能なのかという不安を払拭できなかった。途中でトラブルが発生すれば、かなり厄介なことになる。それでも、この車との長旅も最後になるかもしれないという覚悟で、意を決して福島の地に別れを告げ、一路遙か彼方の九州、宮崎へと向かったのである。

週末の遠征生活は終了したが、梁川までの通勤も、なかなかの距離を稼いでくれた。点検等でディーラーに行くと、「３６，０００㎞かと思ったら、３６０，０００㎞なんですね」整備の方もあきれていた。いつだったか、聞いてみた。「この車は、いったい何㎞まで走れるんですか」「今まで、こんなに走った方がいないので、わかりません」それでなくても毎日、異常音と付き合っているのである。もはや、動いているのが奇跡なのかと思えてくる。

走行距離が３６万㎞を超えているのである。地球一周が約４万㎞である。ということは、すでに地球を９周している計算になる。先日、ある方と車の走行距離の話をしていたところ、私の車が３６万㎞も走っていることを伝えると、「もうすぐ月ですよ」と教えてもらった。

月までは、３８４，４００㎞である。そうである。私の車は、月を目指して走っているのである。夏頃に気づいた。あの異常音が消えている。今頃になって、調子がよくなってきたのか。通勤距離が一気に短くなり、コロナ禍により遠出もしなくなった。車に負担がかからなくなったということか。逆に考えると、今までは、酷使されすぎて悲鳴をあげていたということか。あるいは、月までのゴールに向けて、いよいよラストスパートに入ったのだろうか。

自分の車が、まさか月に到達するとは思わなかった。ここまでくると、妙な愛着がわいてくる。どうせなら、３８４，４００㎞は超えてみたい。だが、いかんせん、急に距離が稼げなくなった。このペースでは、ゴールはかなり先のことになる。それまで、車はもつのだろうか。その不安と闘いながら、地道に月を目指すこととする。